東京外語会主催　文化講演会

「近現代モンゴルを巡る国際関係」

講師　青木雅浩　東京外国語大学大学院総合国際学研究院講師　＜モンゴル・中央ユーラシア近現代史＞

日時：７月１日（土）午後２時―4 時
（続いて懇親会）

場所：東京外国語大学本郷サテライト４階(講演)
および７階（懇親会）

プロフィール

2000 年早稲田大学第一文学部東洋史学専修卒業。2002 年早稲田大学大学院文学研究科史学（東洋史）専攻修士課程修了、2010 年同博士後期課程単位取得満期退学を経て、同年早稲田大学より博士（文学）を取得。モンゴル国オラーンバートル大学、ロシア連邦モスクワ大学に留学。2016 年 4 月より現職。

主な研究業績として、『モンゴル近現代史研究：1921～1924 年－外モンゴルとソヴィエト、コミンテルン－』(早稲田大学出版部、2011 年)、「一九二〇年代前半の外モンゴルにおけるソ連、コミンテルンの活動指導者たち」(麻田雅文編、『ソ連と東アジアの国際政治 1919-1941』、みすず書房、2017 年)、「外モンゴルからみた満洲－一九二〇年代」(加藤聖文、田畑光永、松重充浩編、『挑戦する満洲研究－地域・民族・時間－』、一般社団法人国際善隣協会、2015 年)、「ボドー事件と外モンゴルの政治情勢」(『史学雑誌』119-3、史学会、2010 年)、「1923 年のモンゴル人民政府とソ連の交渉－中ソ交渉におけるソ連の譲歩と外モンゴルー」(『東洋学報』91-3、東洋文庫、2009 年）など。

講師からのメッセージ

中央ユーラシアに広く住まうモンゴル人は、辛亥革命を機に、清朝の支配から脱することになります。同時に、彼らは自民族の自立を目指して様々な活動を起こしました。このようなモンゴル人の活動は、国際情勢や、周辺の諸勢力（日本、中国、ロシア等）から強い影響を受けることになりました。

国際情勢に翻弄されながら、民族自立を必死に模索するモンゴル人の姿は、近代以降世界中で展開された民族運動の典型と言えるものでしょう。20 世紀のモンゴルの遊牧社会は、その牧歌的な語感とは裏腹に、激動の歴史の最中にあったのです。

今回の講演では、民族自立を目指す 20 世紀のモンゴル人の活動を、中央ユーラシア情勢、東北アジア情勢との関係から解説し、民族運動と国際情勢の関係について考えていきます。そして、この近現代モンゴルのあり方が、現代のモンゴルにも影響していることに迫っていきたいと思います。